

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

NITS・教職大学院・教育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 実施機関：上越教育大学教職大学院 連携機関：長野県教育委員会（長野県総合教育センター）
	事業名：【NITS・上越教育大学教職大学院コラボ研修】 長野県教育委員会と上越教育大学教職大学院連携講座～教科専門・校種を超えて学び合う教員研修～
	研修等名：長野県教育委員会と上越教育大学教職大学院連携講座 ～教科専門・校種を超えて学び合う教員研修～
	開催日時：①令和6年6月14日、②7月12日、③7月25日、④9月3日、⑤9月20日 各日とも9時40分～16時10分 開催場所：長野県総合教育センター（長野県塩尻市片丘南唐沢 6342-4） 参加人数（総数）と参加者の属性：計5回総数 217人、属性内訳（小学校 96人、中学校 72人、高等学校 38人、特別支援学校 16人）、講座毎の内訳（①16人、②56人、③41人、④73人、⑤31人）

目的：

上越教育大学は、長野県教育委員会と連携し、「実践的な教員研修を通じて教育現場の課題解決と教育の質の向上を目指す」という目的のもと、教員研修講座を実施している。参加者が体験を通じて新たな気づきを得られるよう、理論偏重型でなく、実践重視型の講座を心がけてきた。

今年度は、「教科や校種の枠を超えた学びの創出」を目標に、全学的な講師公募を行い、専門分野を横断する講師を採用した。これにより、小中高一貫教育に焦点を当て、参加教師が一体となって学び合える場を提供することができた。また、「教育現場の今日的な課題解決」をテーマに、最新の実践研究成果を取り入れた新たな講座を開講した。たとえば、「国語・英語科連携による『ことば』を通じた深い学び」や、「学級経営と授業経営の一体化」など、従来の枠組みを超えた内容を通じて現場の課題解決を支援している。参加教員のみならず、大学教員や研修運営に携わる指導主事の職能開発を促進するための講座開発にも取り組んでいる。これにより、教育の現場と大学双方の成長を目指している。

内容：

- ① 特別の教科道德 授業づくりの理論と実践～小中9年間のつながりを意識した道德科授業づくり～
内容：学習指導要領に基づく道德的価値の理解、小・中のつながり、授業の在り方講義と模擬授業
- ② ICTを活用した授業づくり～教科学習における効果的なICT活用～
内容：学習者中心主義、個別最適な学び・協働学習、ICT ツールの活用方法に関する講義、Jamboard等を活用したグループワーク
- ③ 「国・英で連携する「ことば」を通じた深い学び」～小中高を通じた言語活動の充実を目指して～
内容：英語と国語の連携による言語活動の充実、思考力・判断力・表現力育成のための授業デザインに関する講義、演習、ワークショップ
- ④ 学級経営と授業経営の一体的な充実 ～学級経営・授業経営両面からのマイアクション～
内容：算数・数学における教材開発、個別最適な学びと協働的な学びを両立させる学級経営に関する講義、演習、ワークショップ
- ⑤ 教師間連携を生み出す特別支援教育～多様な児童生徒の実態把握と指導支援～
内容：児童生徒の実態把握、個に応じた指導・支援、自立活動、小中高・特別支援学校の連携に関する講義、演習、意見交換

成果：（番号は上記研修番号と一致）

- ①参加者の声：「指導要領に立ち返ることの大切さを再認識できた」「役割演技の意義と活用の仕方など、模擬授業を通して、具体的な指導方法を学ぶことができた」
データ：事後アンケートにおいて、94%以上の参加者が「受講目的を概ね達成できた」と回答
- ②参加者の声：「ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びを促す授業作りのイメージが掴めた」「様々なアプリの活用方法を学ぶことができた」「ICT活用の有効性を体感できた」
データ：事後アンケートにおいて、96%以上の参加者が「受講目的を概ね達成できた」と回答
- ③参加者の声：「教科の枠を超えた言語活動の重要性を認識できた」「他教科から学ぶことの多さを改めて感じた」
データ：事後アンケートにおいて、97%以上の参加者が「受講目的を概ね達成できた」と回答
- ④参加者の声：「縦糸と横糸のバランスの重要性を理解できた」「教材開発を通して、児童生徒の目線に立つことができた」

データ：事後アンケートにおいて、100%の参加者が「受講目的を概ね達成できた」と回答
⑤参加者の声：「実態把握をすることの重要性を理解することができた」「個に応じた指導・支援の重要性を再認識できた」「特別支援教育における教師間連携のコツを学ぶことができた」
データ：事後アンケートにおいて、97%以上が「受講目的を概ね達成できた」と回答

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

- ①知識伝達型にならず、体験を通じて新たな気づきや視点が得られるよう講座の構成を工夫した。その結果、ICT 活用や個別最適な学びに関する講座は好評で、実践的な演習を通して学びを深められたようだ。
- ②研修開始時のアイスブレイクや最後の振り返りを「対話」ベースで進め、少人数グループでの交流を通して、受講者の主体的な課題発見・解決や実践的なスキル習得を実現するデザインを心がけた。その結果、対話をとおして、多くの受講者がお互いの価値観から学び合い、明日の実践へとスムーズに繋がることができたと感じた。
- ③各講座の最後に指導主事や講師による 80 分程度のリフレクションを位置付け、自身の価値観や信念を見つめ直し、より深い学びへと繋ぐよう努めた。その結果、校種・教科を超えた交流を通して、新たな視点や気づきを得られたという声があった。その一方で、時間不足や議論の深まりを求める意見もあった。今後は、研修前後のサポートの充実、参加者の多様性確保、リフレクションの改善などを検討し、より効果的な研修を目指したい。

アイディアや工夫したこと：

- ・長野県教育委員会との協議を通じて、長野県が抱える「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」といった教育課題やニーズを把握し、研修テーマを設定した。全学的に講師を公募し、専門分野を横断する講師陣を構成することで、教科や分野など従来の枠組みを超えた「越境講座」を新規に設定できた。
- ・講師が一方向的に知識を伝達するのではなく、講座冒頭で参加者自身の授業実践や学級経営の枠組みを省察し、今日自分が学び取りたいことを自己申告した上で講義を受講してもらうという新たな試みを導入した。
- ・グループディスカッションを通じて自校の課題解決に向けたビジョンを共有するなど、対話を重視した研修デザインで実践に繋げるよう工夫した。また、参加者同士が協働し自身の文脈において見方や解決策を見出す演習を意識した。例えば、役割演技などを通じて中心発問の作成の在り方を考え、適切な指導方法に自ら気づける研修デザインとした。

